

第27回

第4章 現代を生きる人間の倫理

合理的精神の確立

今回学ぶこと

近代の自然観と科学的精神の特徴について理解を深め、ベーコンの経験論の思想を通じて、近代的な学問の目的や方法について考える。デカルトの「考える我」という思想を理解し、心身二元論について考える。さらに、パスカルの思想を通じて、近代の合理的精神の功罪について考えを深める。



講師
小林和久

今回のキーワード！

科学革命／ベーコン／「知は力なり」／経験論／デカルト／「われ思う、ゆえにわれあり」／心身二元論／合理論／パスカル／「人間は考える葦である」

近代科学の誕生 ～科学革命と経験論～

中世の学問であったスコラ哲学に代わり、近代には自然科学という新しい学問が生まれ、地動説を体系化したコペルニクスやガリレオ・ガリレイ、ニュートンなどが活躍する。その特徴は、人間の感覚と理性を頼りに、観察や実験を通じて、自然の中にある法則を見いだしていくことだった。

この新しい自然の見方は「科学革命」と呼ばれるが、その正しさを基礎づけたのが、ベーコンに始まる経験論という哲学である。彼は、学問の目的を人類の福祉の増進と考え、「知は力なり」と主張する。これは、自然科学の正しい知識は、自然を支配して人類を幸せにする力をもつものである、という意味である。そして、正しい知識獲得のために、かたよった見方や思い込みである「イドラ」(幻影、偶像)を捨てて、自然をありのままに観察して、それらに共通する法則を見いだす「きのうほう帰納法」を重んじた。

デカルトの心身二元論 ～近代的な自然観～

デカルトは、確実な真理を発見するために、あえてあらゆるものを疑ってみた。その末にたどり着いたのが「われ思う、ゆえにわれあり」（私は考える、だから私は存在する）ということだった。つまり、疑い得ない真理とは、現に疑い考えているこの私のこと、「考える我」だった。そして、学問の方法として、疑うことのできない確実なことから出発して、論理的に推理を重ねることで、新しい知識を見いだす「演繹法」^{えんえきほう}を重んじた。

彼の思想では、「考える我（精神）」と、「考えられる対象（物体）」という、2つのものが相いれずに存在していることになり、心身二元論という考え方が確立される。この考え方によれば、自然は、機械的に説明できるただの物質であり、人間が好きなように操作できるものになる。このような自然のとらえ方は、「機械論的自然観」と言われ、近代の自然観の基本になった。デカルトのように、理性的な思考を重んじる考え方は合理論と呼ばれる。

「近代」の反省 ～モラリストの考え方～

合理的精神が広まっていった16～18世紀に、現実の人間を観察して、人間の生き方について考え、随想風の言葉で表現したフランスの思想家たちをモラリストと呼ぶ。

「人間は考える葦である」という言葉で有名なバスキルは、その代表者である。彼は、人間を、「考える」という偉大さと、「葦」のような悲惨さの中間に、揺れ動く存在とみなした。そして、そのような人間には、キリスト教の救いが必要であると考え、デカルト的な理性のみを尊重する近代の傾向に反省をうながしている。

Kobayashi…コラム

近代哲学の2人、共通点は？

近代哲学の代表者であるベーコンとデカルト…それぞれ経験論と合理論の祖とされています。新しい学問や考え方を生み出した2人ですが、それぞれの人生はまったく違います。

ベーコンは23歳でイギリスの下院議員になったり、法律家としても活躍したりしますが、賄賂を受け取った疑いをかけられて地位を失います。そして最後は、^{にちどり}鶏に雪をつめ込んで冷凍の実験をしている最中にひいた風邪が原因で、肺炎をおこして亡くなったそうです。

一方、デカルトはフランス生まれですが、32歳のときにオランダに移住します。親から相続した遺産のおかげで、生活に困ることはなかったようですが、53歳のときにスウェーデンの女王に招かれて、朝の5時から女王に講義をすることになります。朝寝坊の習慣があったデカルトには辛い日々だったらしく、風邪をこじらせて肺炎で亡くなったそうです。

今でも「風邪は万病のもと」と言われますが、近代哲学の代表者2人でさえ、風邪には勝てなかったようです。